

間では——馬方彌太夫——で通つてゐた。

大丈夫切場を語る腕前があるのに、わざと好んで端場を語つたのは、役場の善し悪しよりも己れの藝格といふものをちゃんと心得てゐたのに違ひない、歌舞伎の尾上松助といふところ。後に五代目彌太夫も好んで越路や其他の端場を勤めたのも、一つは師匠四代目に私淑したのかも知れない。

名人長門は時に氏太夫の道明寺に東天紅の端場を語つたり、又長門が寺子屋だと氏太夫が寺入りを勤めたりするやうなことは、其昔は随分遣つたものらしい。舞臺効果を揚げる爲めには、少しのこだはりもなく相談づくでやつたものだ、開けたものである。

彌太夫は文化十一年生、明治元年三月十九日、五十五歳で死歿。

## 五 洒脱春太夫（五代目）

湯屋の三助もした

文化五年、堺の鍛冶屋町に生れ、明治十年七月二十五日、七十歳で死んだ。煙草庵丁鍛冶の子。若い時は角力が好きで、素人角力の大關にまでなつたことがある。

二十二歳の頃、大阪へ流れて来て、随分身を持ち崩し、天満の靈府の附近の湯屋の三助になつて稼いでゐるうち、暇をぬすんで好きな淨瑠璃を四代目氏太夫に教はつた。たゞこれだけの経歴だが、これが後に淨瑠璃の大本山、天下の文樂座の槽下の榮位に登らうとは………そして門下に越路（攝津大掾）を育て上げた。



竹本春太夫

大まかなあの藝風はこの人の性格まる出で、平生頗る大度量な洒落なところがあつて、始終、芝居の樂屋や表方の連中を大勢引連れて茶屋や料理屋へ押しかけた、本町橋のある料亭では、一時に百五十人前の鰻井を注文されて面喰

つたといふことだつた。

春太夫の妻は梅園と號する畫家で、一方明清樂の師匠をしてゐたやうな人だから馬鹿に氣位の高い女で、常に「夫は藝人だが私は先生だ」と誇つてゐたので、春太夫は無條件に己れの妻

を「先生々々」と呼んでゐた。

春太夫が末期の時、妻の梅園は死に直面した夫の顔を寫生しようとした、ふと眼を開いた太夫は「なるだけ男ぶりに描いといてや」と注文した。(此畫像は攝津大掾家に所藏されてある)身の丈四尺一寸の着物を被た。六十一歳の還曆祝の時に袴を着て四斗俵をかるると差し上げたさうだ。

越路(攝津大掾)や大隅が、役不足で往々江戸へ奔らうとするのを克く看破して、江戸に就て學ぶべきの師なし、大阪でなければ本當の藝は磨かれないと、屢々訓戒を加へた、それで二人ともに遂に大阪に踏み止まつたといふ話もある。

## 六 風流染太夫(六代目)

自叙傳三十冊を綴る

寛政十一年生、明治二年四月三十日、七十二歳で死歿。三代長門の跡を繼いで文樂座の櫓下となる。越前大掾の門下。長門太夫、春太夫と伍して文樂座の重鎮、三段目語りの大立者。慶應元年櫓下に入つた時、薄雪のかけ腹で大好評。